

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	『源氏物語』研究
Author(s)	ベロバ ナディア フリストバ,
Citation	日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集, 24・25期 : 1 - 15
Issue Date	2010-12-24
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00038803
Right	
Relation	



『源氏物語』研究

ベロバ・ナディア・フリストバ

始めに

『源氏物語』とは何でしょうか。日本中、源氏物語を自分で読んだり、読まなくても話を聞いたりして、少なくとも源氏の運命、あるいは人生などをだれでも知っています。近年、『源氏物語』の千年紀で日本だけではなく、世界中で『源氏物語』に興味を持つ人が増えています。翻訳のおかげで、特に英訳のおかげで、日本語ができない人でも、『源氏物語』を楽しむことができます。

『源氏物語』は千年前に書かれた物語ですが、どうして今でも大勢に興味を持たれているのでしょうか。学者とか研究者だけではなく、一般の人々もです。もちろん古い文学は今でも、読まれています。だいたい人は特別な興味を持っているようです。2000年頃に「源氏ブーム」が始まり、源氏の漫画、ドラマ、映画、アニメ、ゲーム、劇、オペラまで出てきました。『源氏物語』だけではなく、「源氏文化」と言える現象が表れます。このレポートの一つのテーマはどうしてそのようなブームが起こったかを考えることです。

光源氏の色事は、特に藤壺との禁じられた恋愛とか伝説的なものがありますが、ほかにも有名な恋人として紫の上、葵の上、六条の御息所がいます。しかし、私の考えではもっと大事な恋人がいました。出会ってすぐになくなった夕顔という女房です。夕顔は光源氏と出会ってからまもなく亡くなりました。このレポートの一つのテーマは夕顔という登場人物が光源氏にとって、どんな女性であったか、そして、短い間に光源氏がどのように影響されたかです。

最後のテーマは夕顔の死です。亡くなったのか、殺されたのか、今まで『源氏物語』の専門家の間で論議が続いてきました。夕顔は六条の生霊に殺されたと言われていますが、どうでしょうか？平安時代に生霊という現象は珍しかったのか、それとも普通の出来事だったのかを調べようと思います。

このレポートではこの三つのテーマに関して仮説を立てます。

『源氏物語』の文化の現代への影響

世界の有名な作品はある時代のある集団の人々にとってとても人気がありました¹。

¹ Shirane, Haruo (Editor) - “The Tale of Genji and the Dynamics of Cultural Production – Canonization and Popularization”, *Envisioning the Tale of Genji-Media, Gender and Cultural Production*, Columbia University Press, New York, 2008, p. 1

しかし、『源氏物語』は時代が変わっても、形態や媒体が変わっても、鑑賞する人間が変わっても、多くの人の興味を引くことができました。『源氏物語』は 1008 年に書かれた作品ですが、今でもよく読まれているし、古典文学研究者だけではなく、一般の中学生や高校生の間でも人気があるらしいです。近年「源氏ブーム」という現象が起こり、『源氏物語』に関わるものが非常に増えたり、大人気になりました。どうしてそんなことが起こったのでしょうか。

「室町時代」の昔から『源氏物語』は色々な学者から評価されています。昔の日本の社会は仏教や儒教の影響を受けていたので、とても低く評価されました。なぜなら、物語ですし（昔物語は一番価値の低い作品と思われていました）、内容はほとんど恋愛なので、仏教や儒教の見方をとると何の役にも立たないものですし、その時代の基本的道徳に反していたからです²。この作品はとても強く批判されたらしいです。しかし、江戸時代の有名な国学者本居宣長が仏教や儒教の見方を大きな間違いと判断しました。『源氏物語』は人間の態度や考え方、物の哀れの例として見るべきで、仏教的な価値はないかもしれないが、文学的、美的な価値は高いと考えました³。そもそも書かれた最初から『源氏物語』の和歌は一般に教養として教えられた物です。ですから、和歌の選集として大変高く評価されていました。確かに時代によって、世代によって作品の評価や意見が変わるのは当然ですが、さまざまな興味深い視点が長く話題になり続けました。

「源氏ブーム」が起こる前、日本人の多くが、『源氏物語』を読まずに、源氏はプレイボーイと思っていたそうです⁴。紫の上とか六条御息所などの名前を聞いただけで、源氏は大勢の女性とつき合っていたと分かり、現代の「プレイボーイ」にイメージが似ているからです。確かに、現代的な見方をすれば、道徳的にも、法的にも、源氏の行動はよくないのですから、許せるわけがありません。しかし、それは当然のことでしょう。しかしそれは、平安時代の道徳と現代の道徳が違うからです。昔の文学作品を読む時に現代の価値観で評価してはいけません。ルマネク・イバン氏はこれが良く分かっており、次のように書いています：

・・・光源氏の行いは仏教の視点や儒学の視点から見ると不道徳なものに見えるであろうが、日本の伝統的な美の感性で見ると、彼は完全に純粹で潔白であるのだと主張した。まさにこの理由のために、光源氏は、他への哀れみに満ち、「あわれ」を良く理解した、

² Shirane, Haruo (Editor) - “The Tale of Genji and the Dynamics of Cultural Production – Canonization and Popularization”, *Envisioning the Tale of Genji-Media, Gender and Cultural Production*, p. 5

³ 本居宣長 in Shirane - “The Tale of Genji and the Dynamics of Cultural Production – Canonization and Popularization”, *Envisioning the Tale of Genji-Media, Gender and Cultural Production*, p. 5

⁴ 清水婦久子 - 『光源氏と夕顔-身分違いの恋』、新典社、2008年、p. 7

古い日本の美德の典型であり、本当の日本的な「良い人物」なのである⁵。

そのようになったのは背景に「源氏文化」という現象があったからです。ハルオ・シラネ氏の論文の中に面白い仮説がありました。『源氏物語』はカルチュラルメモリに結びつき、江戸時代に「源氏文化」と言えるものが誕生したらしいのです。ほとんどの人が本を読めなかったのに、多くの人が源氏の経験についてよく知っていました。どうしてかと言うと、「ナラティブメディア」のおかげです⁶。ナラティブメディアとは舞い(『清海波』)や、能楽(『ののみや』、『葵の上』)などです。また、『源氏鬘鏡』という本があり、そこでは『源氏物語』の区切りが一つの歌になり、覚えやすくなっていたということです⁷。それだけではなく、『源氏鬘鏡』では歌の上に挿絵があった、つまりイメージがあったので、かなりインパクトがありました。考えて見れば、文章より挿絵が大事なのでしょう⁸。昔の農民は宮中や貴族の生活など見たことがなかったのですが、絵があることで、簡単に源氏の世界がイメージできたのではないのでしょうか。源氏が好まれた理由の一つは視覚的なものだったからです。現代なら、源氏の漫画やアニメ、映画などかなり人気があります。物語をあまり知らず、よく理解できなくても、ほとんどの人は源氏の世界を見て楽しめます。やはり、「エキゾチック」ですし、美しく魅力があります。

「源氏文化」には、ナラティブメディア以外、もう一つのタイプがあります。「デザインメディア」です。デザインメディアは衣類や紙、漆工芸、家具、お菓子などですが、そういうタイプのものにも源氏に関わる装飾やモチーフがよく現れ、その商品が上品で高級に見えます。『源氏物語』はとても細やかで凝ったものと思われたので、皆こんな上品なものを持てば、自分も上品に見えると思ったのでしょうか。

それから、『源氏物語』の作品自体はもっと縁遠く、貴重なものになっていきますが、現代の日本人の意識にも生き続けています。カルチュラルメモリの中で色々な技術、アートテクノロジーを駆使して、『源氏物語』は生まれ変わり続けているからです。

『海外における源氏物語の世界』という本に次のような仮説が紹介されています。『源氏物語』は現代の日本の文化にも影響を与え⁹、日本で非常に人気のある恋愛ドラマの主人公も愛情と同時に苦悩があるのですが、「それは、日本の伝統的なコンセプトであ

⁵ Rumanek, Ivan R.V. - "Proclamation of Love: East and West"(海外における源氏物語の世界：翻訳と研究)、風間書房、2004年、p. 237

⁶ Shirane, Haruo - "The Tale of Genji - Cannon Formation, Gender and Cultural Memory", (海外における源氏物語の世界：翻訳と研究)、風間書房、2004年、p. 50

⁷ Shirane, Haruo - "The Tale of Genji - Cannon Formation, Gender and Cultural Memory", p.43

⁸ Shirane, Haruo - "The Tale of Genji - Cannon Formation, Gender and Cultural Memory", p.51

⁹ アンシェン・ソニア - 『井戸から汲み上げる他国の水-「源氏物語」』(海外における源氏物語の世界：翻訳と研究)、風間書房、2004年、p. 265

る『もののあはれ』に通じる心である」と考えられます¹⁰。私も気づいたのですが、日本のドラマでは情熱的なシーンとか、感情に溢れている場面は、ほとんどが自然の中と設定されています。例えば、花びらが舞い散る桜の木の下とか、星がキラキラしている夜空の下など。トロント大学の学生が、もしかすると、これは源氏物語の影響かもしれないと書いています。源氏の時代には、季節と自然には重要な役割がありました。花とか植物に特別な意味があったので、言葉で詳しく言わずに自分の感じていることを伝えることができ、味わい深くなるのです。ですから重要なシーンは自然の中にあれば、感情が強まると思います。しかしそれは、『源氏物語』が直接の起源ではないと思います。昔から日本にはそういう文化があり、『源氏物語』でもそれが書かれただけではないでしょうか。

日本だけではなく、近年『源氏物語』の人気は海外でもどんどん高まっています。トロント大学のアーンツェン・ソニア氏¹¹によれば、それは十年ほど前から広まった日本のポップカルチャーのおかげだそうです。最近アーンツェン氏が教える日本文化の授業にも受講者が増えてきたので、どうしてこの授業を受けるのかと学生達に聞いたら、色々な理由が上げられたそうです。もちろん、日本が好き、日本文学が好きという答えもあったらしいですが、アニメと漫画の影響が大きいそうです。例えば『あさきゆめみし』という『源氏物語』の漫画がよく読まれているそうです¹²。そして、学生達は「ポップカルチャーから入り、『源氏物語』の「原文に触れたい」という動機でクラスにやってくるのです¹³。

昔から『源氏物語』は人気がありましたが、現代のメディア、テクノロジーのおかげで『源氏物語』が生まれ変わり、以前よりわかりやすくなったので、今の世代も、海外の人々も日本の昔の文学を楽しむことができます。

光源氏 - 完璧な男性でしょうか

『夕顔』の巻までは、光源氏の憧ればかりが描かれています。源氏の美しさや教養、心の優しさなどだけを読むと、何をやっても優れている源氏は人間として理想的です。こんなに優秀な人間はもはや人間ではない、神ではないのかと思えます。そのような憧れの的の源氏が乳母のお見舞いに行ったので、乳母も、乳母の子供達も感動します。自分は身分が低いのに、こんなにも優秀な男君がわざわざ訪ねてくれたからです。最高の思いやりではありませんか。特に乳母は、源氏のように優しく、美しい方は過ちなんてするはずがないと考えます。

しかし、完璧なはずの源氏は自分の恋人、夕顔を守れませんでした。しかも、夕顔が死んだ後、どうすればいいか全く分からず、子供のようにうろたえます。それで、後の始

¹⁰ アーンツェン・ソニア - 『井戸から汲み上げる他国の水-「源氏物語」』、p. 265

¹¹ アーンツェン・ソニア - 『井戸から汲み上げる他国の水-「源氏物語」』、p. 264

¹² アーンツェン・ソニア - 『井戸から汲み上げる他国の水-「源氏物語」』、p. 264

¹³ アーンツェン・ソニア - 『井戸から汲み上げる他国の水-「源氏物語」』、p. 265

末はすべて、遺骸のこと、寺に頼むお経なども、スキャンダルにならないように、乳母の息子、惟光がします。そう考えると、これまで誰もが憧れた源氏はそれほど理想的には見えません。『夕顔』の巻は源氏の失敗、最初の本当の恋の悩み、苦しみを表していると思います¹⁴。『夕顔』の後、源氏はだんだん年を取り、色々な経験をするので、それまでより人間らしく見えてきます。最初、光源氏という男性は優れすぎているため人間のように思えませんでした。だんだん大人になり、人生の苦しみや苦労を経験することで、読者には同じ人間として身近に感じられてきます。

夕顔

夕顔と源氏の出会い

『源氏物語』には光源氏以上に有名な登場人物がいます。紫の上、葵の上、六条の御息所という非常に人気のある女性たちです。この三人の女性たちは源氏と長く付き合うので、よく分析されています。しかし、光源氏の恋人の中に もう一人重要な女性があります。夕顔という女性です。夕顔は身分の低い女性でしたが、源氏からひじょうに愛されました。無邪気で純粋な彼女は源氏がそれまでに知った女性たちとはぜんぜん違います。そして、夕顔には秘密の過去があり、最後まで謎めいた女性でした。夕顔は源氏と出会ってから、すぐ亡くなるので、長大な『源氏物語』の中ではあまり重要な人物でないと思われています。しかし、源氏にとって、夕顔はとても大切な人でした。死ぬまで夕顔のことを思い出したり、夕顔の娘と侍女のお世話をしたりします。もし、夕顔とのことがただの遊びだったら、そこまでするはずないでしょう。

源氏と夕顔の出会いはとても不思議です。この世で最高に光輝いている天皇の御子、伝説の光源氏と三位の中将の娘、しかも、世間の目を逃れている女性です。身分が非常に大きな意味を持つ平安時代では、普通なら、この二人が出会う可能性はまずないでしょう。しかし、偶然というか、運命というか、源氏と夕顔は出会い、恋に落ちました。

源氏は重病を患っていた大弐の乳母のお見舞いに行こうとしました。そして、御所を出て、身分の低い庶民の暮らす五条に行きました。普通なら、源氏のように身分のある人はそんな所に行かないので、源氏にふさわしい立派な車で行くことはできませんでした。乳母の家に着くと、大門が閉まっており、源氏は外で待たされました。その時、隣家の白い壁に、美しい純白の花が咲いていました。皇族の源氏はそれまで、そんな平凡な花を見たことがなかったので、感動しました。そこでその名を家来に聞き、この質素な花は人間のように見えるので、人間のような名前をつけられ、夕顔と呼ばれていると知ります。

感動した源氏が家来に一枝を折ってくるように頼んでいると、その家からかわいい娘が出て来て、白い扇にのせた夕顔の花を源氏に差し出しました。香の染みた扇にはきれいな文字で歌が書かれていました：

¹⁴ 陣野英則 - 『かたほ・まほ』(夕顔-第8巻『人物と読む源氏物語』)、勉誠出版、2005年、p. 37

「心あてにそれかとぞ見る白霧の光添へたる夕顔の花」

この歌から光源氏と夕顔の恋物語が始まりました。歌を見てから、源氏はこの隣家の娘に興味を持ちました。そんな貧しくぼろぼろの家はどうしてこんなに上品な歌を作れる方がいるのだろうか。それで、源氏は惟光に隣家に住んでいる人が誰か調べさせました。

ところで、平安時代には「貴族社会において和歌を詠じ書写することは単にコミュニケーションの手段¹⁵」というだけでなく、必須の教養として貴族（女も男も）はこれで評価されました。『源氏物語』の中で源氏が愛している姫君達-藤壺、紫の上、六条の御息所、朧月夜、明石の上も和歌はとても上手で名声を得ている女性達です。だから、源氏に愛されました。しかし、女三の宮、末摘花は身分の高い姫君たちなのに、和歌が全く詠めないで、源氏にとって魅力がありませんでした。やはり平安時代に理想とされる女性には和歌を読めることが大事な教養でした。

どうして源氏はそんなに身分の低い女房に興味を持ったのでしょうか。実は、それは『夕顔』の巻の前の巻『帚木』で説明されています。『帚木』の中の『雨夜の品定め』で、理想的な女性とはどのようなものかについて議論があり、光源氏、頭の中將、左馬頭と藤式部丞が自分の経験を語りました。その時、左馬頭は上・中・下の階級の女房を比べました。若き源氏は上の階級の女性としか経験がありませんでした。義理の母、藤壺との初恋と年上の六条の御息所ですが、どちらもうまく行きませんでした。そして、頭の中將は中の階級の美しく、純粋な女房を愛しており、かわいい娘まで産んでくれたのですが、奥方がそれを恨んでいたため、突然女房も娘も姿を消してしまいました。よく探したのですが、どうしても見つからず、今でも、忘れられないと話します。

こんな話を聞き、源氏は自分でもそんな恋がしたいと望みました。それで、ぼろぼろのあやしい家から上手に書かれた歌が出てきたら、思いを巡らせたのです。

夕顔の本質

夕顔という女性はいったいどのような方でしょうか。短い期間源氏と付き合っただけなのに、深く印象を残しました。一見したところ彼女は世事に疎いように見え、とても無邪気で従順な女性です。源氏が見た夕顔は確かにそういう純粋で気の弱い女性でしたが、源氏の知らないところで夕顔はとても苦労したので、物思いが癖になり、どんな小さいことにも悩みました¹⁶。

夕顔と源氏は付き合ってもお互いに顔や名前を隠しました。現代の考え方では、それはとんでもないことなのですが、その時代には男性は自分の素性を隠し、女性の家に行くのは不自然ではなく、古来そういう習慣があったそうです。しかし、夕顔は自分の名

¹⁵ 吉見健夫 - 『源氏と夕顔の贈答歌』 夕顔-第8巻『人物と読む源氏物語』、勉誠出版、2005年、p. 40

¹⁶ 藤河家利昭 - 『夕顔』(物語を織りなす人々 源氏物語講座2)、勉誠社、1991年、p. 94

をどうして隠したのでしょうか¹⁷。藤河家氏の夕顔について書いた文章にそれについて面白い話がありました。昔は『葛城の一言主のかみ』と言う伝説がありました：

（一言主の神は）役の行者の命令で、金峰山から葛城山まで、岩橋を掛けたが醜い容貌を恥じて、昼は姿を隠し、夜だけ働いたので、完成しなかったと言う伝説がある¹⁸。

この伝説は夕顔とどんな関係があるかと言うと、一言主の神と同じように姿を隠しています。しかし、醜いと言うわけではなく、今の自分の境遇が恥ずかしいからです。元々夕顔は故三位中将の可愛がった娘であり、源氏ほど高い身分ではなかったとはいえ、かなり豊かな家で生まれ育ちました。しかし、父親が亡くなってしまって、身分も財産も急になくしてしまいました。そして頭中将の恋人となり、かわいい娘も産んで、2年間幸せな生活を送ったのですが、右大臣の四姫君（頭中将の正妻）から脅すような手紙が届いたので、気の弱い夕顔は娘を連れて逃げました。それで、五条のそのような見苦しいところに隠れました。山里に逃げたかったのですが、その年はとても寒かったので、そうできませんでした。そんな怪しいところに住むことになりましたが、以前の自分の身分、生活と比べるとやはり大違いなので、これをひじょうに恥じて、世間との付き合いを断ちました。

源氏と付き合い始めたころ、彼が自分の名前と身分を隠していたので、夕顔も侍女も源氏がどのような方か推測しました。そして、関係が進んでいっても、彼は名前さえ教えてくれなかったので、夕顔の気持ちは傷付きました。やはり自分は下品に見えるのだらうと思って、とても恥ずかしかったのです。でも、そういう悩みや心配は源氏の前では一度も見せませんでした。源氏は夕顔が亡くなった後、侍女の右近からこの話を聞いたのです。夕顔の見せた態度と心は全然違っていました。

夕顔は本当の自分を見せなかったことで、源氏の心を捕まえたのかもしれませんが。同じ頃に源氏が付き合いしていた六条の御息所は源氏を深く愛していたので、しつこく手紙を送ったり、気持ちをはっきり表したりしましたが、逆に源氏に嫌がられてしまいました。

『源氏物語』を読むと、確かに源氏は自分の気持ちをそのまま表す女性があまり気に入らないようです。例えば、源氏の初恋の女性、藤壺は源氏が好きだとはいっさい言わなかったのに、ずっと源氏から愛されました。また、紫の上は源氏の娘（源氏と明石の上の娘）を育てましたが、自分には子供がいないことに苦しみ、その上源氏と愛人の子供を育てるというのはきっと辛かったでしょうが、決して文句を言いませんでした。そういう気持ちを源氏はきっと分かり、何も言わずに自分の子供のように娘を育ててくれたので、紫の上を一層愛したと思います。

どうして源氏からそんなに愛されたかと言うと、このような関係で初めて源氏は自分

¹⁷ 藤河家利昭 - 『夕顔』（物語を織りなす人々 源氏物語講座 2）、p. 90

¹⁸ 藤河家利昭 - 『夕顔』（物語を織りなす人々 源氏物語講座 2）、p. 90（新潮日本古典集成一、135 頁頭注）

がリードできると感じたのではないのでしょうか。それまでの恋愛は年上の女性たちばかりだったので、どうしても、源氏より経験が豊かでした。それに身分も高いので、恋愛関係の持ち方にも決まりがあったそうです。でも、夕顔は生まれつき無邪気で子供っぽい性格で、すぐ脅えるので、源氏は守ってあげたくなかったのでしょうか。しかし、そうできなかったのも、ひじょうに悔いが残りました。

しかし、夕顔と源氏の出会いは本当に運命の出会いだったのでしょうか。それとも、ただの見間違えだったのでしょうか。夕顔が源氏に送った歌は本当に源氏にあてて書いたのでしょうか。歌をよく見ると、源氏に言及があります。そうだとすると、どうしてこの方が源氏だと分かったのでしょうか。顔を見たこともないし、まったく普通の車に乗っていたので、よく考えると、夕顔に分かるはずがないでしょう。実は、夕顔は頭の中將の元恋人です。（『雨夜の品定め』で話していた、姿を消してしまった恋人）。もしかすると、夕顔は源氏が中將だと思い、歌を送らなかったのかもしれませんが。よく考えると、そういう可能性が高いのですが、後で、自分の間違いに気がついたのなら、どうして認めなかったのでしょうか¹⁹。

清水婦久子氏によれば、それは見間違えではなかったからです。夕顔は自分から元恋人の頭の中將のもとから逃げ、庶民の多い五条あたりのぼろぼろに家に身を隠しました²⁰。すると、頭の中將に歌を送っては不自然と今さら思うわけではないでしょう。また、頭の中將の隨身や童の名前も良く知っているはずで、確かに、夕顔は源氏の顔を見たことがなかったでしょうが、源氏の隨身、惟光を見れば、たぶん車に乗っている方が源氏と分かっていたでしょう²¹。

夕顔の定め

夕顔は、登場した時に、長生きしないことが分かります。どうしてかと言うと、源氏と夕顔の最初の出会ってからさまざまな死の象徴が現れるからです。

一つの象徴は白い色です。私が初めて読んだ時には、全然気づきませんでした。確かに、白がよく出てくるのですが、私には、白色の意味は純粹、美しさ、平静など、全部夕顔の性格を表しているように思えたので、人物にぴったりの比喩的な使い方とと思いました。欧米では、文学でも、日常生活でも、白の意味は純粹、美しさなど、非常に望ましい意味があるので、まさか死に関係があるとは全く思いませんでした。

しかし、仏教の影響で日本と多くのアジアの国で白い色は死を表します。葬式とか切腹の時もほとんど白い着物を着ます。しかも、日本の古い伝承や物語では、死んだ人の幽霊、特に女の幽霊は真っ白の着物を着ています。

¹⁹ 陣野英則 - 『さらぬ別れなくもがない』（夕顔-第8巻『人物と読む源氏物語』）、勉誠出版、2005年、p. 38

²⁰ 清水婦久子 - 『光源氏と夕顔』（光源氏と夕顔-身分違いの恋）、pp. 23-24

²¹ 清水婦久子 - 『光源氏と夕顔』（光源氏と夕顔-身分違いの恋）、p. 23

『夕顔』の巻では最初のページから白色のイメージが濃厚です。まず、隣家の垣は檜でできているため、白っぽく見えます²²。

続いて、白い涼しげな簾です。日本の夏、特に京都の夏はとても蒸し暑いので、初夏に涼しく過ごすために白い簾を出してきます。夕顔の家も同じように白い簾がありました。

次は純白の微笑むような真っ白の夕顔の花です。初めて見た源氏は夕顔の花の平凡さと美しさに感動しました。そして、夕顔に会った時に、この女性の純粹さと美しさに打たれ、夕顔の花に例えて、「夕顔」と名付けました。しかし、夕顔は花が咲いてから、すぐに散ります。もしかすると、こんな名前は縁起が悪かったのかもしれませんが。源氏と出会って間もなく、夕顔の花のように夕顔も亡くなってしまいました。

最後の白は夕顔を乗せた扇です。平安時代に、特に王宮で扇は男女関係においてとても大切な役割がありました。女性と男性は話す時に絶対顔を見せないように話しました。なぜなら、相手の顔を直接みるのはとても失礼だったからです。だから、女性は普通簾越しに話したり、扇で顔を隠したりしました。男性は扇しか見えないので、その扇を見て、相手の顔や性格を想像しました²³。着物や手紙の字体、扇なども女性の魅力、気品の評価につながりました。普通なら扇はとてもきれいに装飾が施されていますが、夕顔の扇は真っ白です。あっさりしたデザインでも、地味なデザインでもなく、本当に真っ白の扇で、ただ一つ歌が書いてありました。

これら四つ、垣、簾、夕顔の花、扇は白の象徴する意味を使って、死の兆しとなっています。

象徴の一つは白ですが、もう一つは源氏と夕顔が出会うときの状況です。出会ったのは源氏の大好きだった乳母が亡くなった直後です。つまり、死んだ乳母との分かれによって、新しい恋を見つけたと言えます。普通なら、そういう時に恋愛のことなど考える余裕はありませんが、源氏は源氏らしく、そんな状況でも、夢中になれる女房を見つけました。でも、そんな悲しい事情で始まった恋は悲しく終わるしかないのでしょうか。

ある日、源氏は夕顔と二人切りでもっと時間を過ごそうと思い、気まぐれに夕顔をすこし遠い古い屋敷に連れて行きました。誰にも言わず、夕顔と右近、惟光、家来を二人だけを連れ、突然訪れました。そちらの家では何も知らされていなかったもので、何の準備もしておらず、使用人も足りないのも、とても困りました。しかし、何とか必要な物はすべて揃いました。それで源氏と夕顔は楽しく一日を過ごせました。その時、源氏は自分の強い気持ちに初めて気づき、それまでの人生からつながっていると思いました。

しかし、その夜、側にいる無心な夕顔を見ていて、急に六条の御息所のことを思い出しました。そして、夕顔と六条の御息所を比べ、全然性格が違うと思いながら寝ました。しかし、真夜中に目を覚ますと、枕元に美しい女性がいました。そして、この見知らぬ女

²² 中野幸一 - 『白-夕顔巻の基調色』(夕顔-第8巻『人物と読む源氏物語』)、勉誠出版、2005年、p. 29

²³ 中野幸一 - 『白-夕顔巻の基調色』(夕顔-第8巻『人物と読む源氏物語』)、勉誠出版、2005年、p. 31

性が夕顔を殺そうとした時、源氏はそれを止め、逃げるその女性を追いかけました。しかし、帰ってみると、愛する夕顔は死んでいました。それで皆ひじょうにショックを受けました。特に侍女の右近はそうでした。源氏はそういう経験は初めてだったので、自分がどうすべきかよく分からず、惟光もいないので、本当に困りました。自分がわざわざ家来や使用人の数を少なくし、できるだけ夕顔と二人切りの時間を過ごそうとしたのに、そうしたことによってこういうことになってしまい、うろたえました。

源氏は夕顔を守ろうとしたのですが、何もできませんでした。夕顔の死は物の怪のせいでしたが、源氏はずっと責任を感じました。ちなみに、これは源氏の初めての失敗でした。今までしようと思ったら、何でも必ずうまく行っていました。だから、自分が大切な人の役に立てなかったことは悔しかったのです。恋人が死んだとはなかなか信じられず、自分も病気になりました。

一ヶ月ほど病気で寝付き、源氏も死んでしまいそうでした。源氏自身も夕顔について行きたがりませんでした。彼の反応は全然おかしくありません。現代の言葉を使えば、源氏は多分鬱病だったのでしょう。とても大切な人を亡くすと、しばらく落ち込んで、どこにも行きたくないという気持ちになります。源氏の病気はどれほど夕顔を愛していたかを示しています。ですから、死ぬまで夕顔のことを思い出したり、彼女が生きていたら、どうなったか想像したりしました。

結局、夕顔と源氏がいっしょに過ごした時間はとても短かったのですが、後に影響を残しました。とても平凡な女房でしたが、光源氏から愛され、二人とも人生が変わりました。この恋愛のおかげで、源氏は成長しました。気楽な恋で、初めて女性をリードする経験をしました。しかし、自分の大切な人を守れなかったので、初めて失敗の悔しさも味わいました。それはすべて否定できませんが、短く物の哀れの溢れた恋愛だったからこそ、一生に影響したのではないかと私には思えました。私には、これはとても日本的な考え方と思えます。例えば、桜の花もとてもきれいに見えるのですが、あっという間に消えてしまいます。それは哀しいことですが、消えてしまったからこそ心の中に大事な思い出として残ります。

『源氏物語』の生霊現象

現代人の中には『夕顔』巻の生霊の部分を読んでも、全然驚かない人がいると思います。どうしてかと言うと、私たちの社会では、珍しい出来事や現象なども科学的に説明できることが多いので、ほんとうにミステリーと言えるようなものはあまりありません。だから、幽霊とか生霊などを信じている方もいるし、全く信じられない方もいるでしょう。それは人によって違うのですが、生霊のエピソードを読んでも、そんなにショックを受けないと思います。幽霊の存在を信じている人でも最初の印象は文学の技術として登場させたと思うのではないのでしょうか。

しかし、紫式部の読者にとって、特に若い女性、女房達には、事実のように思われたのではないのでしょうか。現代と違い、昔は科学が進んでいなかったので、多くのことが説明できず、ただ不思議と思われました。例えば、病気になると、科学的な理由は分からず、宗教的に説明され、悪霊のせいでは体が悪くなると考えられました。病人を治すにもお坊さんに頼んで祈ってもらうぐらいしか方法がなかったらしいです。

夕顔が死ぬ夜、源氏は真夜中に枕元にいる美しい女性を見ました。この女性はこう言いました：

「私がどんなにあなたを愛しているかしのれないのに、私を愛さないで、こんな平凡な人を連れていらっしやって可愛がられるとはあまりにひどい。恨めしい方」

それからこの得体の知れない女は夕顔に近づき、絞め殺そうとしたので、源氏は跳び起き、刀を引き抜いて、この幽霊の女を切ろうとしましたが、姿が消えてしまいました。そして、夕顔のそばに帰ると、夕顔はもう死んでいることに気がきました。

原文では夕顔を殺した女の名前ははっきり書かれていないし、源氏も女の幽霊の顔ははっきりとは見えなかったのですが、さまざまな方法で、犯人の名前を暗示します。様子や言葉から読者の心には六条の御息所ではないのかと感ぜられるでしょう。今でも、『源氏物語』の研究者の間では誰が夕顔を殺したか議論が続けられています。色々な意見があるのですが、一番可能性が高いと認められているのは六条の生霊が犯人という説です。しかし、それについては色々不明瞭なことがあります。どうして夕顔のことを知っていたのか、まだ生きているのに、どうやって幽霊となって動き回ることができたのかとか。創作なので、可能性は無限にあるという方もいるのですが、そんな単純な説明ではなかなか納得できません。小説なら何でもありえますが、生霊となって人を殺すというのは聞いたこともないし、そのような考え方は非常に面白いと思います。

六条はそもそも身分の高い女性で、前の皇太子の正妻でもあり、平安時代の基準では、ひじょうに優れた女房です。しかも、源氏より年上で、恋愛経験も豊富なので、源氏は六条にとってただの遊びでしかありません。源氏はその時、まだ十七歳だったので、結婚などするつもりも全くなかったと思います。(源氏は十三歳で葵の上と結婚しましたが、年も違うため、うまくいかず、夫婦関係は冷たいものでした)。おそらく源氏は六条が優れた女性であるといううわさを聞いて、興味を持ち、一生懸命親しくなろうとしたのでしょう。最初、六条は源氏にあまり興味を持っていませんでした。なぜなら、六条にとって源氏はまだまだ子供だし(源氏は10年下)、そんな関係が始まっても、源氏と結婚しなければ、恥になります。彼女の評判は傷つき、軽蔑されるかもしれません。だから源氏と付き合う気持ちはなかったのですが、源氏の根気に負け、恋人になりました。そうやってしまうと、六条は情熱的に源氏を愛し、恥ずかしいほどの愛情を抱きました。

しかし、源氏はそういう気持ちを理解せず、夕顔に出会うと、夢中になって、六条のことをあまり考えなくなりました。源氏にとって六条はひじょうに魅力的な女房です。身分も高く、年上で、色々優れた才能を持つ最上級の女性ですが、六条の求めるものは大きすぎます。しばらく源氏が訪問していないと、彼女は源氏に自分の気持ちをはっきりと表す歌を送りました。平安時代には女性が男性に歌を送ることは憚られていました。どうしてかと言うと、はっきり自分の気持ちを表すことは下品と思われていたからです。その時から源氏は六条を訪問するのをやめ、頭の中で夕顔のことばかり考えるようになりました。

それで、六条は大変苦しみ、嫉妬のあまり夕顔を殺してしまったのです。しかし、六条の御息所はそれを自覚していませんでした。夕顔を殺したのはすべて嫌な夢だと思いました。だからどんなに夕顔のことが嫌いだとしても、わざわざ彼女を殺したりするつもりはなかったと思います。しかし、源氏から無視されたことで、夕顔を恨んだりしたのは、そのような憎しみがひとつになってしまい、思わず夕顔を殺したのでしょう。夕顔の死は内証にされたので、六条は自分が何をやってしまったのか分かりませんでした。そして、葵の上を殺したときもただ嫌な夢と思っただけでした。自分の行動や源氏と言葉を交わした記憶がありませんでした。しかし、次の日朝起きると、着ていた物すべて、髪の毛が芥子の香りが染みつき、何度洗ってもその香りは消せませんでした。平安時代、物の怪を退散させるために、お祈りをしながら芥子を焼いたそうです。物の怪は芥子の香りをとても嫌うそうだからです。六条は葵の上が亡くなったという知らせが来た時にやっと、自分が何をやってしまったか初めて気付きました²⁴。それで、ひじょうに後悔し、それを恥じて、隠棲しました。また娘は伊勢の巫女になって罪を償うためについて行きました。そのような大きな罪を犯して、ひじょうに恥入り、自分にも責任を感じましたが、源氏も恨みました。源氏と会わなければ、こんなに辛い思いをしなかつたらろうと思ひ、死ぬ前も、死んだ後もずっと源氏を憎んでいました。しかし、いったいどうやってそんなことができたのでしょうか。生霊になれば、身体を動かすことなく人を殺すことができるのです。生霊の信仰と役割については以下に詳しく説明しようと思います。

「生霊の役割」

平安時代の社会ではたくさんしたこと、特に病気は説明できなかつたので、「物の怪」や妖怪が原因だと考えられました。確かに、昔から日本の物語や文化は妖怪や幽霊がいっぱいのです。ですから、『源氏物語』に物の怪や霊が出てもおかしくありません。

『源氏物語』での夕顔の死に方はかなり変わっています。紫式部が夕顔を殺したければ、わざわざと生霊を使う必要なんてないでしょう。夕顔は元々身体が弱く、病気や事故で簡単に死ぬ可能性が高かつたのですから。それでも、突然生霊に殺されるのにはびっくりします。生霊の登場は唐突で怪訝に思えるかもしれませんが、こうなるにはいくつか大

²⁴ 藤本勝義 - 『源氏物語の「物の怪」文学と記録の狭間』、笠間書院、1994年、p.5

きな理由があります。

まず、平安時代に病気、特に精神的な病気は憑霊と思われたそうです。例えば、「瘡病（妾やみ）」の状態は現代のマラリアで、一条帝は2ヶ月ほど断続的に症状が現れたので、これは物の怪のせいと言われました。そして、藤本勝義氏によれば、『夕顔』で現れた生霊は、これがあれば、『葵』の巻の葵の上の生霊事件が自然に見えるようにということになる²⁵。つまり、読者はもう生霊の「存在」を一応知っているのです、もう一度現れても不思議には思いません。紫式部が見せようとしたのは失恋した女性の精神的な不安や苦悩なのでしょう²⁶。清水氏によれば、生霊が登場するのは、

パラノイアの妄想であり錯覚であるとする精神分析学的見地……からの発想があらうし、何よりも、紫式部のこの物の怪観が重視されていると思われる²⁷。

生霊というものは「心の鬼」とも呼ばれています。苦しみや怒り、憎しみなどは誰でも心の中に抱えているからです。平安時代、ものすごく強い憎しみを持つと、その気持ちは身体から離れて、物の怪になり、憎んでいる相手を震え上がらせることができると考えられていました。昔はそういう信仰があり、紫式部は読者にこの信仰を自分でも感じさせたかったようです。

憑霊の正体である御息所の心の働きを突きつめていき、生霊が生じざるをえぬ必然性を築き上げている。生霊はまぎれもなく出現したのである²⁸。

葵の上の死に六条の御息所の生霊が関わっているのは否定できない事実です。読者もそのシーンを読むと、この出来事の恐ろしさを生々しく感じられるでしょう。その後、六条の生霊も、亡霊も、怨霊のようになって、源氏の恋人や子孫にまで取り付きました。葵の上の死後、六条は物語の中でこの上もない悪者になりました。

紫式部が描いたシーンは臨場感がかなりありますが、読者の心を動かすために書いたようです。しかし、紫式部の物の怪観は同時代の一般人とは違います。もし自分で物の怪や生霊のことを本当に信じていたら、あんなに恐ろしくリアルなシーンを書くはずないでしょう。

物語中には物の怪に襲われる登場人物が何人もいます。紫の上、女三宮、大君、浮舟、夕顔、葵の上。面白いのは全員が女だということです。みな心痛や精神的苦悩がありました。どうして男性は一回も霊に取り憑かれないのでしょうか。もしかすると、紫式部が見せたかったのは平安時代の女性の悩みなのではないでしょうか。女性は宮中に閉じ込められており、

²⁵ 藤本勝義 - 『源氏物語の「物の怪」文学と記録の狭間』、p. 225

²⁶ 藤本勝義 - 『源氏物語の「物の怪」文学と記録の狭間』、p. 4

²⁷ 藤本勝義 - 『源氏物語の「物の怪」文学と記録の狭間』、p. 5

²⁸ 藤本勝義 - 『源氏物語の「物の怪」文学と記録の狭間』、p. 7

家族や親戚以外の男性と話す機会はあまりありませんでしたし、恋人や夫に不満があっても、はっきり言えませんでした。もし、勇気を出して、自分が不満に思うことについて話せば、下品と思われるし、逆に嫌われるかもしれません。だから、黙って、我慢するしかなかったようです。そうすると、精神に色々な問題が起きたり、体調を崩したりするでしょう。そういう場合、その人は物の怪に魂を奪われていると言われます。現代でも、科学的に心と体の関係は証明されています。心に不満や悩みがある時、そのままほうっておけば、体の調子が必ず悪くなります。平安時代の人々は理由は分かっていなかったかもしれませんが、心と体がつながっていることはちゃんと知っていたようです。

紫式部の読者が女ばかりだったことも男性が霊に取り憑かれぬもう一つの理由でしょう。それで、女だけが襲われたのです。最近、源氏研究者の間ではこの物語は貴族の女性にとって教科書として書かれた物だったと考えられています。そういう目的で書かれたのなら、内容はピッタリだと思います。色々な女房の行動や言葉使い、心の悩みを描いているので、かなり勉強になると思います。そんな目的があるとしても、実際にこんな風に霊に憑かれたかどうかは誰にも分かりません。

江戸時代まではだいたい物語は文学としてとても高く評価されていたのですが、特に『源氏物語』は仏教と儒教からたいへん批判されました。また、物語は仮名で書かれていたので、男性には読みにくかったのかもしれませんが。

生霊は物の怪のひとつですが、『源氏物語』はその物の怪にあふれています。日本文学ではそんなものは作品にあまり書かれていません。しかし、『源氏物語』の前から人間には魂が二つあるという信仰がありました。ひとつの魂は体が死んだ後、魂として存在し続けます。もうひとつの魄は人間が活着している間に強い憎しみや恨みを持ったら、体から離れて、恨んでいる人を殺すこともできると信じられていました。

六条の御息所は夕顔と葵上をひじょうに恨んだので、生霊となって二人を殺してしまいました。彼女は自分にそういうことができるなんてぜんぜん知らなかったので、自分の行動が後で分かって大変後悔しました。紫式部は敢えて生霊を登場させ、平安時代の読者の物の怪に対する深い信仰を使って、六条の悩みと苦しみを感じさせたかったのでしょう。

おわりに

『源氏物語』が優れた作品であることは否定できない事実です。何世紀も前に書かれたものなのに、今でもたくさんの人に読まれています。文学作品としてだけではなく、現代になって作られた漫画や映画など、色々な形で楽しめます。『源氏物語』は文学として現れましたが、今では日本の文学というより、日本の文化の大事な中心として生き続けています。長大な『源氏物語』に登場する色々な人物の中で、早くなくなった夕顔は重要な人物と思えます。夕顔との恋愛のおかげで、源氏は成長し、初めて失敗した苦しみを味わったのですから、とても大事な経験でしょう。そして、夕顔が早くなくなったため、彼女の思い出を死ぬまで心の中でとても大切にしました。夕顔を殺した六条は源氏のせいでも

苦勞したので、生霊となって人を殺し、重い罪を犯しました。平安時代の生霊や物の怪の信仰は現代から遠く離れた世界のことのようですが、比喩と考えれば、その信仰は精神的な不安や自分の分からないことを表すのですから、私たちの世界から遠くありません。

『源氏物語』には一生研究し続けても、分からないこと、不思議なことがきつとたくさんあります。ですから、何年経っても、何冊本を書いても、『源氏物語』の謎を解きたいと思う人が永遠に出てくると思います。

参考文献

Shirane, Haruo (Editor) -“ The Tale of Genji and the Dynamics of Cultural Production – Canonization and Popularization”, *Envisioning the Tale of Genji - Media, Gender and Cultural Production*, Columbia University Press, New York, 2008

Shirane, Haruo - “The Tale of Genji - Cannon Formation, Gender and Cultural Memory”, (海外における源氏物語の世界：翻訳と研究) 風間書房、2004年

Royall Tyler (Translator), *The Tale of Genji (Unabridged)*, Viking Penguin, United States of America, New York, 2003

藤本勝義 - 『源氏物語の「物の怪」文学と記録の狭間』、笠間書院、1994年

興謝野晶子 - 『全訳源氏物語 - 「桐壺」新装版』、角川書店、2008年

大塚ひかり - 『全訳源氏物語第一巻桐壺～賢木』、ちくま文庫、2008年

清水婦久子 - 『光源氏と夕顔 - 身分違いの恋』、新典社、2008年

陣野英則 - 『かたほ・まほ』(夕顔 - 第8巻『人物と読む源氏物語』)、勉誠出版、2005年

陣野英則 - 『さらぬ別れなくもがない』(夕顔 - 第8巻『人物と読む源氏物語』)、勉誠出版、2005年

中野幸一 - 『白-夕顔巻の基調色』(夕顔 - 第8巻『人物と読む源氏物語』)、勉誠出版、2005年

吉見健夫 - 『源氏と夕顔の贈答歌』 夕顔 - 第8巻『人物と読む源氏物語』、勉誠出版、2005年

藤河家利昭 - 『夕顔』(物語を織りなす人々 - 源氏物語講座2)、勉誠社、1991年

伊井春樹編集 - 『海外における源氏物語の世界：翻訳と研究』(国際日本文学研究報告集3)、風間書房、2004年

アーンツェン・ソニア - 『井戸から汲み上げる他国の水 - 「源氏物語」』(海外における源氏物語の世界：翻訳と研究)、風間書房、2004年

Rumanek, Ivan R.V. - “Proclamation of Love: East and West”(海外における源氏物語の世界：翻訳と研究) 風間書房、2004年